へ 5
2114
3

東京牛込區餘丁町百拾貳番地 坪内雄藏

發句

春

伊勢の夷家にも来たり今朝の春
庭訓の往来誰か文庫より今朝の春
元日やおもへは淋し秋のくれ
元日は田ことの日こそこひしけれ
幾霜に心はせをの松かさり
春たつや新年ふるき米五升
山家にとしを越て
誰聟そ歯朶に餅おふうしの年
山嵐雪かもとより正月小袖を送りけるを
誰やらか形に似たり今朝の春

2114
3
利 門 號 699 巻
へ5 門 號 2114 巻 3
明治三十七年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

青柳とし宮の名残まて玄都主して元日量まく
扇く結ひもつしぬ

二月ふもぬうり八せしれ　花はちるに

季吟勤くを書頭

わ歌の行と句つや八重は八重春

風麦亭

青くまさかなの　野山うれ

却ちりよ雨ふとしきとりて

蘆きおて誰人いまに　花は春

漸既無名屠蘇を書き紀三百は是實録曾見

大津絵の筆はじめや　何仏

高よやさの風りて見れ家の中菜のさくるを今も粮

歌書にて姫よまみや　庭竈

よしくや様まきせたる　猿の面

人もえぬ　春や　鏡はうつの妻

若菜よ宮きや伊勢は初たより

子日しる郷く出つる友もうれ

古畠や　芹清く出く　男とも

四方よら清　若菜もまくえもとんぶ

よくもん根を若菜をれさく　垣根うれ

蕗蒻よ代くえうせ川若菜うれ

一とせよ一度つ摘むなく　菜哉

山唐子芹は飯炊させて海川まて持来るまほよ

我きぬの鶴哺のむれ芥は反
鶯や舞はうし給
黄鳥や舖に叢する擬は先
むはりめに牛も柳むと嘆つくし
吉べはあやなふ伐の二季むし
淡菜はの月ふみて
箕主ふおきて梅さく条添の垣根哉
伊賀はまかきにて
猿かしく古葉いう老まなりに南り
秋風の吟譏は山家をふ二句
梅かゝしきのつや鶴をぬすまれし

捏の本は花まかきまぬすゝみぬ
梅咲やあちらく落くれ　京太良
あまくそりむきあちへ梅は花
鶯まで蔵いる竹の末やしるれ
手負うむまをへ梅はさるまうれ
わ生鴉たく
山家
伊賀の山家よ雲をあらくりの竹の出ぬ座をりみそ
薪をくみ忍ふしてなかしき事なり
多るまう人雲母ほまる器は梅は宜
つゝ人何某みちのくまくてまきるは鉄して
ままそはなまし藪の中なる梅は出れ
伊勢は拝垣の周ふさ梅一本も見くは子良は稚の庭よ

一本なかりつゝ

御子良子の一もとゆかし梅の花

網代民部が息にあひて

梅の木になをやとり木や梅の花

園女か亭にて

暖簾の奥ものふかし北の梅

山里は万歳おそし梅の花

卓袋亭 月待

月待や梅かたけゆく小山ふし

里の子よ梅おりのこせうしの鞭

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

去来のもとへなき人のかたへとふらひつかはすとて

菎蒻のさしみもすこし梅の花

梅か香にのつと日の出る山路哉

何某新八を去年二月十七日先立て一周忌に

父梅丸子かなしみにたへける

梅か香に昔の一字あはれなり

うめ咲てよろこふ鳥はけし 紀武

紅梅や見ぬ恋作る玉すたれ

乙州か江戸へおもむくとき

梅わかなまりこの宿のとろゝ汁

うめ柳さそ若衆かな女かな

かそへきぬやしきやしきの梅柳

梅折て椿よ待よ たもとゝつれ

柳子へ文の柳に
鶯も魂に寝つるか　嬌柳
まねものにさはる柳は枝へかな
八九間空て雨ふる柳かな
傘に押分見たる柳かな
精雑に詠
もろく成ぬやなよなよまま柳
正月もここらあたりや　星月
桑門宗波御せんを讃させける
古草たくわへ成ける人き　蹄こうれ
贈柱国
笠はらに柳一筋　旅出武
よし某清水にて二句
涼風て笠に　波清水　武

尾州笠寺納
喜雨みのしたるは　雲なかな
笠てふやりし後　窓もさらはあれ
春雨やまきのまれ草みの蓑
不性さやつき起されし春の雨
赤坂菴
春雨や笈吹うくる河寿
春雨や嬉み草は立や柳の漏
春なれや名もなき山はうすかすみ
大日枝やしをひき雑し　一寿
叡山
伊賀の川波の東新大仏
丈六に陽炎高しいしはうへ
かれ芝やまたかけろふの一二寸

陽炎の我肩に立紙子かな

かけろふや柴胡の原の薄曇

野水堂にて

いとゆふに結ひつきたる煙かな

拾ひ物は梨は椿や花やしき

猿所旅人に

艸の名見て春よ瀬田はわかく

袖よこすらん田螺の海士のひまをなみ

藻にすたく白魚もとらは消ぬへき

曙や白魚しろきこと一寸

留別

鵜の子は白魚おくる別かれ

白うをまつかひあら杖らしみなれ

蜆子圖讃

白魚や黒き目を明く法の網

老慵

蛎よりも海苔をは老の売もせて

子理にて

海苔汁の手際見せけり浅黄椀

おとろへや歯に喰あてし海苔の砂

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓の音

是橘か剃髪して医門に入を賀して

初午に狐の剃りし頭かな

伊勢にて

神垣やおもひもかけす涅槃像

神路山を出るとて西行の涙をしたひ増賀の信をかなしむ 二句

裸にはまたきさらきの嵐かな

何の木の花とも志らて匂ひかな
梅やいせは　白子の店おろし
荘子絵賛　唐土は俳諧とらむ花の志す
蝶はゆめまくり野中は日新なれ
起よ〳〵我友にせんぬる胡蝶
名木亭　蝶は羽の幾度こゆる塀のやね
古池や蛙とひこむ水のおと
なかき日も囀りたらぬ雀かな
原中や物にもつかて啼雲雀
雲雀よりそらにやすらふ峠かな
臍峠　高野にて　父母は頻にこひし雉子の声

ひはり啼中の拍子や雉子の声
蛇くふときけはおそろし雉の声
姨石によ啼かやしたるきゝかな
松よ須磨おもしろそむ蕊
蝶とまりて揉まく寝る峰の蕊
寝るとも寄峰かえん嵐は巣
菖蒲まき口々谷をとり紙草履
田家にありて　麦飯にやつるゝ恋か猫の妻
猫の恋やむとき閨の朧月
湖水眺望　辛崎の松は花より朧にて
志かせ越にて　越人にこゝろ

二股にわかれて見えけり麻の葉

鶯の笠落したる椿かな

落ざまに水こぼしけり花椿

将去の賛

試椛のむし　櫻桃　柿の木ゝ

大津に出る山猿を見て

山猿もきくなるよ雪ゆうしきみれ艸

呂丸の撰にて発句しきりける

當帰よりあはれは塚のすみれ草

菩提山

山寺のかなしさ告よ野老掘

二乗軒

藪椿門はむぐらの若葉かな

龍尚舎にあふて有職の人を待侍るを

物の名を先とふ荻のわかば哉

茅舎の画賛

葎さへ若葉はやさし破れ家

木曽の情雪や生ぬく春の草

青柳の泥にしだるる潮干かな

住る方は人にゆづりて杉風が別墅に移る

草の戸も住かはる代ぞ雛の家

ふしみ西岸寺任口上人に逢て

我衣にふしみの桃の雫せよ

尚白がもとへゆくるを

只一枝桃やかかる木情られ

草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり

両の手に桃と桜や草の餅
煩へは餅をもくはぬ桃の花
咲みたす桃の中より初さくら
まはみか田よりさなかりし京さくら

伊賀の上野薬師寺初会
初さくら折しもけふはよき日なり
顔に似ぬ発句も出よ初桜
なら七重七堂伽藍八重さくら

雨はふりけれは
草履の尻折てかへらん山さくら

水口にて二十年を経て故人土芳に大仙寺にてあふ
命ふたつ中に活たる桜かな

山さくら瓦ふくもの先二ツ

と破然にて
留守といふ小僧なるらん山さくら

探丸子のきみ別墅の花見もよほさせ給ひけるに昔のあともさなからにて
さまさまの事おもひ出す桜かな

笠のうらに書付侍る
よし野にて桜見せふそ檜木笠
桜かりきとくや日々に五里六里
扇にて酒くむかけや散さくら
艶なるや花見るハ雑のさ海
鸛の巣に嵐の外のさくらかな
似あはしや豆の粉めしに桜かれ

木はもとの汁も艶もさくら花
万手別眼
色くや様をなれし花は差
雲の根は櫻に咲て志まひけり
古跡や花は緑出のひろさまき
高原の先達お得し山さくら
白雲みのおく
うらやまし夏世の中みなさくら
阿蘭陀も花に咲るけり馬に鞍
愛方知酒聖貪姑貨錢神
花によう手旅てるの酒白く飯恩し
世にさかる花ふも絶仏や汁け
吟行
菜畑に花見の酒の香をかし

観音は麓見ゆる川花見る
花咲て七日鶴見る棒かれ
物皆自得
花に桜の蛇なるもひそ友雀
鶴は巣も見る花は霧くる
草菴
花みて精ふと眺の浅草哉
翠五き松のもとの谷の老木はさいて重ねける
花とこの咲ハさくらきたく生まお一樹のたのみ
のみに翠ハくと云くして後に賢者のそしりをまく
淋しさや花みけるの翠なりけ
家清も花見は生まハ七さ衛
瓢竹菴に添まいれて旅の折りひいとあさりはれて

花を宿にはしめ終りや廿日ほと

旅立ける日

此ほとを花に禮いふ別れ哉

花の陰硯にかはる丸かな

龍門にて

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

龍門の花や上戸の土産にせん

よしのにて

花さかり山は日ころのあさほらけ

しはらくは花の上なる月夜かな

平尾村にて

花の陰謠に似たる旅寝かな

かつらき山の麓を過るに四方の花はさかりにて峯〻はかすみわたりたる明ほのゝけしきいとゝ艶なるに彼神のみかたちあしゝと人の口さかなく世にいひつたへ侍れは

猶見たし花に明行神の顔

二見の圖を拜み侍りて

うたかふな潮の花も浦の春

路草亭

紙衣のぬるともをらん雨の花

西行上人の畫賛

すてはてゝ身はなきものとおもへとも雪のふる日は寒くこそあれ花のふる日はうかれこそすれ

子にあくと申す人には花もなし

伊賀の國花垣の庄はそのかみ南都の八重櫻の料に附せられけるといひつたへ侍れは

一里はみな花守の子孫かや

蒼堂橋本子にて

あさは杠　花やあふれとの作里

珍碩が洒落堂の記ありて

四方より花吹入て鳰の波

居住の人より清風一樽本曾は獨居家一軒おくり
しきりにかゝしひなおろして

鉢の子て若葉せん　二升樽

あれは山寺花は山二町の月夜　大比叡
書山はもとありて探雪の画けり琴は贊に

若葉や鳥も昔まゝ　琴は臺

孫右はこちはくまで行まゝおくる

むく起に　鐘は家の中にて成ひ弐

僧専吟餞別

鶴は毛の黒きころもや　花は雲

露沾公にて

西行は庵もあらん　花は庭

玄梅子浄川の猿楽をきゝて

花見にとさす母一生し　柳原

桜をちらすと扇ひらく女ありて
花に扇ありもたくむる　扇は草

よしのをくるとて

飯貝や身まかりて　田螺屋

峯へ入や一里おくて　小山伏

よ野は花なりけるまゝ人に暮うちさかきよりのく

音小うたのまぎらはしくなるかぎりは松嶋またのみて
四ッ五器の揃はぬ花見心かな
支考東行餞別
此心推せよ花に五器一具
上野の景
花に酔へり羽織着て刀さす女
志ほしらでは尾もすりくね春の鶉
蝙蝠も出よ浮世は花にとり
誇はあし雉子腥なくく継ぎて
路通子みちのくに趣くを餞
草枕まことの花見しても来よ
是はやきひとて旅店に櫻をうけて
躑躅生て其は陰まで干鱈さく女

画賛
猪山や虹あきは夕涼し
丹波市とやいふ所にて日は暮かゝりけるを
草臥て宿かるころや藤の花
山吹の露菜の花のかこち顔なるや
西河にて
ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音
画賛
山吹や笠にさすべき枝の形
山吹や宇治の焙炉の匂ふ時
内裏雛人形天皇の御宇とかや
物の名の蛸や古郷は花に鳥
芭蕉植て先にくむ荻の二葉哉
雲と隔つ友かや雁の活別

名所八幅のうち

貝よせの風の手本や和歌の浦

行水やよしのゝ滝の筏山伏

苫積て貪たる女擬よ侍

桂草や花のさかりを盛かゝく

留ぬ川おもやあしの桜麻

木白亭

なかまに出て

古寺かなる雨や二葉の菊子たち

初瀬にて

春風や人よおきつゝ三笠山

春の夜やおかりの人ゆかり堂は鶴

鐘つきぬ程まなかをかる春の暮

行春にまつの浦にて追付たり

旅途三子望の折りひ橋にふさりて

行春や奇幅一魚は貝ハなみさ

白湖水情よ

行春をうつすの人をさそふしこけ色

用舞よ春はよ指を出里よ

入相はうつ日も富之尾 春はなれ

夏

卯月の末庵にかへりて旅のつかれをはらすとて

夏衣いまた虱をとりつくさす

旅行

一ッ脱て後に負ひぬ衣かへ

ほとゝきす正月は梅の花さけり

清く聞ん耳に香焼て郭公

ほとゝきすなく／＼飛そいそかはし

きすこと云魚を網して真砂の上にほしちらしけるを烏の飛来りてつかみさる是をにくみて弓をもておとすそ海士のわさとも見えす若古戦場の名残をとゝめてかゝる事をなすにやといとゝ罪ふかく猶むかしの恋しきまゝに

須磨のあまの矢先に鳴か郭公

ほとゝきす消行方や嶋一ツ

俄に西海[illegible]高角より雲まやとりて

蔦まとふやたつのやとの村[illegible]

[illegible]なるぬくゝる武口村の男雑冊をもちきたりとてやさしき事を乞けれはそのそれを

野しまを横にる雲もけふ　子規

不卜一周忌琴風興行

子規啼や雨のふる[illegible]　観翁

洛陽にて

京にても京なつかしや子規

子規大竹藪をもる月夜

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

ほとゝぎす啼や五尺のあやめ草

烏賊うりの声まぎらはし郭公

ほとゝぎす啼や黒戸の浜庇

ほとゝぎす[illegible]く麦は村尾花

一声の江に横たふやほとゝぎす

ほとゝぎす声よこたふや水の上

曙やまだ朔日にほとゝぎす

おもひ出す木曾や四月の桜がり

ならにて鹿の子をうむをみて此日におゐてをかしければ

灌佛の日にうまれあふ鹿の子哉

灌佛や皺手合する数珠の音

衣更てたゞ一ツ葉はひとへなれ

椹は実や花なき蝶の世捨酒

圓覺寺大顛和尚ことしむ月のはじめ遷化したまふよし誠や夢のこゝちせらるゝに先道より其角がかたへ申つかはしける

梅こひて卯花拝む涙かな

其角が母五七日追善

卯の花も母なき宿ぞすさまじき

卯花やくらき柳は及ごし

知足亭ニおゐて

かきつはた我に発句のおもひあり

大坂ニて或人のもとにて

杜若かたるも旅のひとつかな

山崎宗鑑やしきにて近衛どの宗鑑がすがたを見て

かきつはたと遊しけるをおもひ出てはきうちて

有がたき姿拝まんかきつはた

手はとくに際うちし杜若　のぼる

白げしや時雨の花の咲つらむ

漁人の彩ちかき芥子は花もたくまへる侍る

雲は鳥またちらすやけしは花

まつらしや草の植る出つらむ

伊豆は嵐梅の小嶋は葉の出行も友は秋か行

御しやうの称まいらせて尾

張の出まで路まいらせまひ来りけるに

いさともに穂麦くらはむくさ枕

甲斐の国山家に立よりて

行駒は麦になくさむやどりかな

麦は種を洞にそめて啼しき雀

秋やまは須麻や秋まる麦　白知

武府にまて於る趣く川はまて人にまちる来りて

餞別に句をいつそゑよとて

麦の穂をたよりにつかむ別かな

二度相葉子かもとにありて今や東へ下らんとするに
ほうらん葉子かくかめる蜂にむ結ふれ

贈桃縁新宅自画自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

招提寺にて鑑真和尚の像を拝し御目は盲させ
たまふ事をおもひはへりて

若葉して御目の雫ぬくはゝや

須磨の浦一見のとき

すまてらに吹ぬ笛きく木下闇

雲岸寺におもむく仏頂和尚の山居の跡あり

木啄も庵はやふらす夏木立

石山のおく國分山といふに人の住捨たる庵あり幻住
庵といふ法淡翁の住捨しとかや眺望にたへたるに
侍れは我身はなしあらたなりとて

先たのむ椎の木もあり夏木立

夏山や枝にえたりの一里かな

松風の落葉か水の音涼し

清瀧や浪に散込青松葉

清瀧や水汲よせてところてん

甲斐山中

山かつのおとかひとつる葎かな

ゆかしし山藪のまけや風の篇
大垣の銚子日光諸代宗翁かたはらに庵据人
岡田何かしをおくる
　梅は露落るにかけし志けさかな
　なほく我を錫に見る夜かな
画賛
落梧のねしをさみきりのさうしるひけるまゝを
いたみ侍る
　おろかき人にたとへん花も夜かな
野中　蜂百々の人を枝折は夜かな
数年居ふて　石はまや夜学を求く露落し
高鉄　夜ふかや盃ともの夢はあと

竹はそやまさ我まうきは絃のすさひ
小傘やしきにて
　うき事しや竹はそよなる人の果
田夜むすひたる浅川は席をさ出るとて
　うくいすや竹の子藪に老を啼
　継あらしは移ろふたし我を行く子
　さき我を淋しかりそよ寒子鳥
　這出よかひやか下のひきは庵
　我庵の枝のちひさくも花まさらん
　かつまを責るなる人を砕す人
　縄禽を生て出けん花川船

初か川を渉り振舞にかゝる隠居に竹合し

かくれ家も目だゝぬ花を軒の栗

文越ん　すれは中山初か川を　桃青

なかゝ山や紫して十くらふ夏の雨

日光山にて見し瀧にて二句

しはらくは瀧にこもるや夏の初

ほとゝきすうらみの瀧のうらおもて

行や帰る斬の鏑はなれかくし

俗士はいさなかにて五月男者國求馬書寄る人々を

忍ひと云ふ

花あやめ一よにかれしもとめかな

佐藤庄司か舊跡は寺に義経の太刀弁慶の笈

をとゞめて什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

仙台にいるにあやめふく日なり画工加右衛門といふ者

紺の染緒付たる草鞋を餞す

あやめ草足に結ん草鞋の緒

嶋中に行まゝきむ　ひたひ髪

経木にや款冬の絵の耳にほとゝく

病中自詠　髪はえて容顔青し五月雨

さみだれはかくれぬものやせたのはし

經藏備へし後も此頃の名月面白さいとあしく処
法の星ぬれ光余流なりし縁ありける
経堂は川に出る名月ならん
光堂は七寶ちりうせて珠の扉風にやぶれ金
の柱霜雪に朽るとも
五月雨の降のこしてや　光堂
五月雨をあつめて早し最上川
日の道や葵かたむく五月雨
芭蕉翁
五月雨や色紙へぎたる壁の跡
五月雨や蚕わづらふ桑の畑
露沾公中に待る
五月雨に鳰の浮巣を見にゆかん
大井河を出て嶋田塚本氏かもとに泊る
さみだれの雲吹おとせ大井河
五月晦日富士おもひ出けるに
目にかゝるときや殊更五月富士
入梅はれの私雨やさみだれき　芭
駿河路や花橘も茶の匂ひ
買揚を待にして紅のさみだれ
法くと根の中の袖ぬれし哉
わすれみぐさと標や番は　芭蕉
東門乙由亭にはじめて

やどりせん藜の杖になる日まで

象潟や雨に西施がねぶの花

栗は西の木と書たのみて世を厭ふ僧の便にもなりけるにや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

挙白といふものゝ武隈の松を見せ申せ遅さくらと

餞別したりければ

桜より松は二木を三月越し

紫陽花や藪を小庭の別座敷　子珊亭

あちさゐや帷子ときの薄浅黄

落柿舎

柚の花に昔をしのぶ料理の間

東川許六餞別　二句

椎の花の心にも似よ木曽の旅

うき人の旅にもならへ木曽の蠅

山中逗留　蚤虱馬の尿する枕もと

ちかさきるひとむかしたる須くも哀なるにや

かゝる涙の角ふりわけよ須磨の秋

更によく菊は流るゝ須磨の花

木曽路の旅を思ひ立て大津にとゞまる比まづ瀬田の螢見に出て

この螢田ごとの月にくらべみん

草の葉を落るより飛ぶ螢かな

せゝの螢

螢見や船頭酔ておぼつかな

己か火を木ゝは蛍や　花のやと
蛍火にねさる首筋かゆき　蛍かな

奥の白河にて

冥宮は宿をかへる雛に甲斐ある掛金
大隠は仙亭大は宿をあけ雛もまちぬ旅かな
霧の古かりし出かけさやかなる道おそろしくても仁山田
氏か家にかゝる名所

雛なくと人のゆくえも待や渡り
鶴飼とふ事の見待るんと幕無多　いさるのひや
されしに

まさなくひ長良の川の　鮎鱠

鶴毎に田うゑとめる傍にゆるとて

おりゐうてやうて悲しき　鶴かな
西まかくおりあるなき　早苗かな

清水流るゝの柳は芦野の里にありて田の畔に
のこる所は清くの傍に小やと社のしまけれは柳の陰よ
起てしまるを待る清き

田一枚植て立さる　柳かな

奥の今は白河にいりて二句

早苗にも我色黒き　日数かな
西か東か先早苗にも風の音

笠を寐るとむものゝ白川の関いかゝ志て憐るゝやと哉

風流のはしめやおくの田うゑ哥

しのふの里もちすりか石をさかして

早苗とる手もとやむかししのふ摺

末付しる時もとるや　田植哥

尾張にて旧交に別る

世を旅に代かく小田の行もとり

羽黒山にあそひて役鶴か泉によつて南谷亭にて

めつらしや山を出羽の初茄子

須田堀本氏にて

菅も蓮の素敷すゝしや　茄子汁

竹ノ塚にて

降すとも竹植る日は蓑と笠

明石夜泊

蛸つほやはかなき夢を夏の月

月見ても物たらはすや須磨の夏

手を打は木魂に明る夏の月

夏の月御油より出て赤坂や

寺涼や夏の月は出の秋ふ

曲翠亭

夏艸や我先達て明しひやし椎

椎の木に蒼惜る　蝉の声

稲葉山

撞鐘もひゝくやうなり蝉の声

立石寺

閑さや岩にしみ入蝉の声

無常迅速

やかて死ぬけしきは見えす蝉の声

人よ悟をきりひとへ

いでやわれよききぬきたり　蝉ごろも

盤斎がうしろむきたる像

團扇もてあふがん人の　うしろむき

佐夜中山にて

命なりわづかの笠の　下すゞみ

風瀑が餞別に

手すゞむる佐夜中山にて　すゞ絶

破風口に日影やよわる　夕すゞみ

長良川十八楼

此あたり目に見ゆるものは皆涼し

尾花沢清風亭

涼しさを我宿にしてねまるなり

すゞしさやほの三か月の　羽黒山

あつみ山や吹浦かけて　夕すゞみ

汐越や鶴はぎぬれて　海すゞし

花みつくおよとてまもし桜の若葉に法師のかくれを

きてのまに

夕ばれや桜にすゞむ　波のはな

小鯛さす柳すゞしや　海士が軒

四条川原納涼

川風や薄柿きたる　夕すゞみ

田家

飯あふぐ嚊がちそうや　夕すゞみ

野水が家居を訪ひけるに

川中の根木をまくら　涼みかな

すゞしさは家見ゆる　住居かな

菊も佛　葉は其中も　すゞしけき

雲みての庭に松を植るを見て

涼しさを直に野松の枝の形

すゞしさを繪にうつしけり　嵯峨の竹

風の香も南に近し　最上川

くもまゝる世にもといひけんおもかげや松風に

茶菴にすゞみて

雪は何隠れ勝る年月　其鑑

羽黒山

有かたや　雪をかほらす　南谷

丈山の像に謁す

風かをる羽織は襟もつくろはず

さゞ波や風のかをりの　相拍子

小倉山常寂寺にて

松杉をほめてや風の　かをる音

雲の峰いくつ崩て　月の山

湖や　暑さを惜しむ　雲の峰

本間主馬か家の名を残して二句

ひらくとあぐる扇や　雲の峰

蓮の香を目にかよはすや　面の鼻

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

夕顔や酔て顔出す　窓の穴

夕顔に千瓢むいて拵ひ事経
昼顔に笑ひ据さくむ 哀なり
越子花は見しり起稲るる昼咲ら
子ともしに昼顔 咲ぬ 爪むらむ
李中もなく文は書修行
昼顔に昼寝せうもの 麻の山
河骨秋波色みてもち鉢若瓢に爪おちもにも下に
芸徒の琵琶若きく花はもの露を接西
下りうまかなさ
稲葉山は松の下涼して
ふりは花 露 いかなるうふれ床

山かけやゆきやしやるむ ふり翅
初生菜四むやちらむ 悔子やせん
花と実と一袋さ 爪の さうられ
夕顔も朝顔もつうれ ふりは花
朝露をよそにしてすし 爪の泥
柳もさ行寝いすし 初生菜
之道題して 我に似れ二つよりれし 若菜ふり
ふりは皮むいて葉ようら 蓮華露
正成像 鐵肝三下此人之情
拵うにかうら 涸や 楊は露
砕て露ん 拵子さみるいしみう人

蓮は実ハ俳諧にせん　花は何じや
　さゝれ亀足をしあらふ清水哉
那須の野の殺生石は野扇ある人かなるかたちひ
さとりの二人鳥は羽をうしそはしよ獨ハ小姫にて
名ありといふ前もおもの色やさしく
　かさゝぎ羽子をは花かな
岐阜山
　蝶羽や古井の清水先のむ
那須は湯泉の神の和歌に浅からぬ縁ありて
友許一方に招れ其序に
　湯を踏て掬ふも招し岩清水
　踏かへ足まや遠くいつくも哉

晋の劉伶をうらやむ
　宮形千年昔は出たる物となり
手をつかはゞけるを宮て古来は称し中法の
なまし人は小神も今や出雲千
修験者のまゝまて行者堂を招く
　夜山に足をかたし拍むもあまとの
秋鴨主人は住ま多く勧く
　山も夜もうあきいつゝや夜生哉
扇風をいたむ
　手向けし草ハ葉に何こゝろかく
松鴻
　松くやすうつくしきく夜は添
　松しはや和をはかる夜の月

新庄 旦水

氷亭にて

氷ふかく氷室につめる寿かな

暑き日を海に入れたり最上川

名月ハ峯く霧やこの暑さかな

蛤は口あけてゐるかつきうれ

さゝの月や鯛ハあかりも塩くじら

名月や蔵子雲打く行くし山

不卜亡母追悼

ゆふ月く静まひたまへ道の寺

なつかしい小かきうら人の蜷の腸

世は夏や湖水ようかく浪のうへ

秋ちかき心はかるや　空嘯

秋

鳴海眺望

初秋の海は青田の一みどり

初秋やたゝみながらの蚊屋の夜着

荒海や佐渡に横たふ天の川

文月や六日も常の夜には似ず

合歓の木の葉越もいとへ星の影

素堂が母七十七を七まはの秋七月七日ことぶきする

に万葉の秋七種を題として

七株の萩の千本や星の秋

文月十七日の夜風雲に立ち白浪銀河のきらを

ひたして烏鵲も橋梁をなし一葉梶をわたし

たま小町がうたを題として

高水に星も旅寝や岩の上

七夕や秋を定むる夜のはじめ

何某が家代々法をして四国へ行人に送る

七ツのや探す星の俄旅

名所八律の内ほし合が井や絶えん立田川

文月やかいま見る比は八朱人

加賀が香をたるとて

熊坂がゆかりやいつの玉祭

木曾山の草庵墓所を過し

魂まつりけふも焼場の煙かな

尼寿貞が死去ありけるを聞て

数ならぬ身となおもひそ玉祭

蓮池や折らでそのまゝ玉祭

舊里にかへりて盆会をいとなむに

一家みな杖に白髪の墓参

盆過て宵闇くらし虫の声

嵐蘭が死去に書る句に

かなしさや枕がみや蟋蟀

太田がやしろにて実盛が甲錦の切あるを見て

むざんやな甲の下のきりぎりす

床に来て鮮にいるゝや詠かくれ

粧は妹かもいるゝや衣かくれ

きりしさや利に鳴る蟋蟀

蜻蛉やゝつきかけし草は花

鶯は家を小流に流るゝやとくす

胡蝶にもなりて秋ある菜虫哉

編つ雨手あまりる雲は紙燭哉

何の香そいるゝつる金待たる哉

寄季下

武智識の名なる僧禅大徳のかたひらや衣かな

いそやつまるゝさもる人は貴さよ

いなつまや清は西をひらあらん

いなつまや雲はるゝ行 又位は峰

本るまゝに宝に骸骨とも見え給ひかすみて結ふるに

き画く舞ふ春は風に吹れ来るにまあはれなれ

なりし此形は世をなかりしんやかの髑髏を捨くしてつひに

爰にはくせわつるゆゑもたく此世あまたに再さまよひのく

いなつまや都はすゝきの穂

骸骨の画

夕風や魚桃竹も揺れなかる

二見の浦にて

硯にもひらひらとやく浪きいしみ

やゝく清水かて

あさくとくしきろく夏文すゝしや

画賛

西行のまくらもかゝる松の雲

曾良に別るゝとて

今日よりや書付消ん笠の露

草菴

反綱しすきやう岬の小花の家

笑ひゆゑに八百結下よこあやふかく作るもの

寄しくれ留主を見ぬ日て哉しき

らし行庭に散のさ為　筆お誘君代

散の春ちらし秋の風

誘君志うしきいとに料理　北枝子

ひやくと塩をふまへて舌を鳴らす

餞しさや病ひ見うら秋の風

あるも茎庵によいさなかれて

秋すゞし手毎にむけや瓜茄子

全昌寺といふ寺に暁ね寒ちかう坐すよくたるに

襦うも紙硯をかゝえて出寺る折ふし庭の柳のちる

けれは

庭掃て出はやてらに散柳

道船に清て寺を出る子やもつるん

大さうしをかるゝもいふへはれかを泥清みえ人も佛

縁をひらけて荘千日泥ぬぐかれるうさいたれた

しくたかし

催うさうはいる死かへる　清め拾

和角蓼蛍有　其餘くよをのきうれ

萩見けるは人に厭はれし原に至りて
胡きり香に漏れぬをかしみ

甲斐村役より

能々見や昼も顔見る一つの垣
萩すりや是も傍まつ葉ならし
能見の原の萩よ峠ゆく故の錦

萩かしや一尾やゝせ山のいぬ

枕引寄て寝たるに一間隔て若き女の声ふたり
ありと聞ゆ老たる男の声もまじりて物語
するを聞ば越後の新潟といふ所の遊女なりし伊
勢参りするとて此関まで男の送りて

一家に女も寝たり　萩と月

小松といふ所にて

しをらしき名や小松ふく萩すゝき

観水亭雨中吟

ぬれて行人もをかしや雨の萩

画賛

白露もこぼさぬ萩のうねり哉

茶堂玄番が家の庭の作りを所望されて

風はきやしどろに植し庭の萩

浪の間や小貝にまじる萩の塵

東寺を過るとて

萩は萩や露をつゝむ羅生門

涼川庵

画賛

芭蕉翁かつて嵯峨に庵を営まれ
し時ちなみて庵一といふ名もまゐらす
韻事風雅しやそのまゐらせしやまとうたなどし
ひとつひとつと祝きけしやまなく
むかしのままに物語まぼろしなへし
ひとりといひける女ありてそれに発句せよといひしく自筆を結
出しけるに

蘭の香や蝶のつばさに薫りの匠
行き暮れて門に入る横雲に菜の花ひらける
本堂縁の田草にかりて破戸の人々に鄰
草の戸を志りや植蓼に唐がらし

青くてもあるべきものを唐がらし

かくさぬぞ宿は菜汁に唐がらし

大風のあしたも赤し唐がらし

夕顔や秋はいろいろの瓢かな

馬上吟

道のべの木槿は馬に喰はれけり

花木槿はだか童のかざしかな

八朔や天のましらたまの露計

高田医師細川春庵にて

薬園にいづれの花を草枕

草いろいろおのおの花の手柄かな

子規の声や多入有る　磯海

嵐雪か四国にわたるとき
讃岐二百十日も我よの渡
むかしきけ秩父殿さへ相撲取
許六の画
猪角力いもとも年よ弟なし
角髪や夷も出羽の相撲とり
三日月や鈴鹿は夕へつかむらん
何事の見たてにも似す三かの月
三日月に地は朧なり蕎麦の花
嵐蘭が墓にまうでて
見しやその七日は墓の三日の月
詠むるや江戸にはまれな山の月

侘て住め月侘斎のなら茶哥
杜牧が早行の残夢小夜の中山にいたりて忽驚く
馬に寝て残夢月遠し茶の煙
月はやし梢はあめを持ながら
明ぼのや二十七夜も三日の月
月はあるじに酒ふるまはんといへは盃持出たり都
の人はかゝるものとて手にもふれざりけるに思ひも
かけぬ興に入て青碗玉巵の心地せらるゝも所から
あの中に蒔絵書たし宿の月
姨捨山は八幡といふ里より西南に横をれて冷しく
高くもあらすかとかとしき岩なとも見えす只あはれ深く

あらし山のまくらもとなく見えぬまでといひけん人もあると
ころにありけてさらに出しきたに何ゆゑか帰る
人の手をたらんとおもひいて洞を出しは

俤や姨ひとりなく月の友

善光寺

月影や四門四宗もたゞひとつ

悼流天賓法師

その魂を招きかへせ法の月

燧ヶ城

義仲の寝覚の山か月悲し

湯尾峠

月になをつゝみかねてやいもの神

月のみか雨に相撲もなかりけり

気比の明神に夜参往昔遊行二世の上人自ら
土石を荷ひ泥渟をかはかせて参詣往来の煩なし

月清し遊行のもてる砂の上

鐘の緒あく

月いづく鐘は沈る海の底　法の道
戸をひらけば西に山なし吹く夜は花のゆふべも夕月
なもうしれ

そのまゝよ月もたのまじ　伊吹山

又玄の宿りの妻のねんごろなるをやさしく見えけれは彼日向守の
妻かみを切て席をまうけられし今更申出て

月さびよ明智が妻の咄しせん

隣なや稲きりかけて月を見る

右翁遺吟をかうむりて

月やその鐘の声は日のしるさ西

正秀亭初會

月代や膝に手をおく宵は宿

鎖明て月さし入よ浮御堂

実は此母と字ハいへども名高けれども世にさのしき南
ふもとの川は比叡を東山に住ける僧を雄くるの
まこともなるまひけるよしいふなる住居すやと光そは坊は
なる川かしはれを

柴の戸の月やそのまゝ阿弥陀坊

石山へ詣ける道にて

橋桁の志のふは月の名残かな

明月のよそほひにとて芭蕉をうゑて

芭蕉葉を柱にかけん庵の月

深川の末五本松といふ所に舟さして

川上とこの川下や月の友

東順老人を悼むよしをき東順が終をとけし

入月の跡は机の四隅かな

川舟やよい茶よい酒よい月夜

月見るに思をのべよといふ題を授けて

月澄や狐こはがる児の供

見る影やまだ片なりも宵月夜

月見せよ玉江の芦を刈らぬ先

武蔵ちか京時仁芭蕉庵とし改以来数年を経たるとあり

明月の出るや五十一箇條

名月や池をめくりて夜もすから

根本寺の坊舎にやとる人をして深省を發せしむ

寺に寝てまこと顔なる月見かな

雲をりをり人をやすむる月見かな

坐頭かと人に見らるゝ月見かな

湖水の橋をわたりたる時はいさゝか清く洲鈎なれは

橋をとをく一條のかきもつとかけたるかとて

いさよひや月見は絵の中なるれ

名月や門は日和さゝ影なよ

寒くとも名月の夜や　菜羽山

古寺翫月

名月や鐘よりさきに清くしき　都の秋し

名月や児達ならね　坐頭柳

名月や海に向へは七小町

名月や二ッ三ッてもせたの流し

名月や川にさしこむ湖かしら

名月や我家へもどる門徒坊

名月や鶴脛たかきさをひろゝ

名月やうれしき筆架けらは湖けし

名月は花かと見えて綿はたけ

名月に麓の霧や田の曇

夜かけて名月若き　すみの秋

義仲庵にていさよひ

三井寺の門たゝかはや今日の月

名月の友をさそひは月の客

しら雲かゝれよし野は月も十六里

あまた代をみ本くちみえやこの月

十六夜もまた更科の郡かな

やすやすと出ていさよふ月の雲

いさよひや海老煮る程の宵の闇

いさよひはわつかに闇の初かな

堅田にて

新麦も斗等に値は安うなりて酒も升二
家賃は安なり蕎麦切一銭小豆せんに弐百文

忌なしりて

名池なくて宿も秋雲の月

葉の邦に清任りて

三十日月なし千年の杉を抱く嵐

芋は蒔や月待里の焼畑

西行谷の麓に流あり女ともの芋洗ふを見て

芋洗ふ女西行ならは歌よまん

竹葉軒といふ庵を訪ひて

粟稗にとほしくもあらす草の庵

知足か弟金右衛門か新宅を賀して

よき家や雀よろこふ背戸の粟

たつ黍や新綿の莚の上遠く
鷄頭や鳥の来る樹椋あらし

寄人庵牧亭にあそひて

萩うゑて竹田の爺はあるじ哉
桟や今年も替らむ萩の傍
枝ぶりは見かへく かゝる芙蓉哉

挹女画賛

雲南はなにそ芙蓉の下葉哉
何くれと小家も秋は柳かけ
秋海棠あはれの色は淡きけ
思ひ行きも実も露もかくもすゝ哉
うしの江て赤坂は一軒をかりて

碪打て吾に聞せよ坊が妻
襟くしき精の小袖を碪かれ

小枝主人のあつまへ下るに別るとて

袖土て扇さく余波かな
桐の葉は鷄もつるるの月
鶴は月の今や忘れぬ峰の鷄
病鳥は夜と落る鳶の鷄

笠田にて

稲すゝめ栗の木伽やまいる
刈込や子稲かへしの鴫は哉
老の名のかくもちて宮十夜
桜の実茨操るの羽音や胡嵐

同しかゝる雲やさりしの後る
ひいて嬉しき蕎麦し木の麻
桂や中川折もひ出ぬ弱むらん

高麗の連衆より題をとりて

扇にて大河原や浪のちるむせひ
猿なきにも吹つふく野まくられ
吹とはす石は浅間の野分かな

江上の破屋を出る程風の声そゞろ寒けなり

野さらしを心に風のしむ身かな

冨士河を渡るとて三ツ計なる捨子の泣あり

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いにしへの常盤の塚あり伊勢の守武かいひける義朝殿に似たる秋風とはいつれの所か似たりけん我も又

義朝の心に似たり秋の風

不破の関にて

秋風や藪も畠も不破の関

一笑追善

塚もうこけ我泣声は秋の風
あか〳〵と日はつれなくも秋の風

旅行

さゝてさへ秋は野末のひとり川

那谷寺ハ奇石さま〳〵に古松植ならへて萱葺の堂

はせを

石山の石より白し秋の風

槐夫の名をつけて

槐の木はその葉ちらしけり秋の風

座右は銘　人の短をいふ事なかれ己が長をとく事なかれ

物いへば唇さむし秋の風

去来がもとより伊勢紀行書おくりけるにおくに書つけ侍る

西東あはれさ同じ秋の風

嵐蘭を悼

秋風に折て悲しき桑の杖

曲翠亭にて　短夜寒

入麺のしたたきたつる夜寒かな

旅窓長夜

九度起ても月の七ツかな

くすし何某が像

むしろをも脊中に負ふて蟷螂

車庸亭二句

秋の夜を打くづしたる噺かな

おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり

人に家を買はせて

世の中は稲刈る頃か草の庵

取職て落穂ひろはん実は菊

刈跡の田面うるゝや里は秋

くろがねや三度起ても落し水

大和の呉竹の内にて
錦ぢや　琵琶にやはらぐ弁の奥
菊花の賛
秋まで残る蝶もなかりや菊は露
草庵は夜
起よとふ菊田のうちなり水の露
まさやかげ九日もたゞしきくは花
葦池にて翁たる菊を愛し其のみの霞の宮迄
ひろきたくみは酒のかけられ侍る 程よく来て 翁吟なと
かれとなれ花お手の遊たれくの寺ならや あなん(?)参ま
いきまふひのいつくら鍋に　猪る　菓
山中温水
山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ
木因亭
かくれ家や　月と菊とに　田三反

如行亭
痩ながらわれよ菊は合ふ
小寄のさびしき味を忘られ
重陽
盃は行水や 桂木 盃
九月九日乙おゝ一樽をたづさへ来りければ
菫は戸や日くれて来て菊は酒
見えて雲はありや 尋ぬは後の菊
思ふ事よやとふく
稲あきは読もめでたし菊は花
大門世をすくふに
琴箱や古物店の背戸の菊
何某木院の亭にくまて おくされけるよ菊は鯰

いと菊しけれは

蝶も来て酢を吸ふ菊の鱠かな

岱水亭にて

影まちや菊の香のする豆腐串

八町堀にて

菊の花咲や石屋の石の間

花藻鋪の古男の人をいへる山の郡集の題によせて

一露もこほさぬ菊の氷かな

菊の露落て拾へはぬかこかな

菊の香やならには古き仏達

菊の香やならは幾代の男ふり

暮にて

菊の香にくらかり登る節句かな

生玉辺より日をくらして

菊に出て奈良と難波は宵月夜

園女の家にて

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

旅磯破蕉の清浅木に題す

清く朝顔を経て志は只何を思ふ

木曽の橡うき世の人の土産かな

如水別野

藤居て木は実草はひとつの花

秋風の吹くも青し栗のいか

斗休亭にて

稲父と親子の子は茂や稲みのん

萬翁と蝶とうれしき草は海

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

去の稲葉一口はくへ猿の侭

蕣うりや行つくすまゝ夕附哉
松たけやかふれた程ハ松の形
よし川蕣やせきし白動へ秋の露
松茸やしらぬ木の葉のへばり付

伊勢より山路をはなれて
蕎麦ハまだ花でもてなす山路哉

中秋の日ハ更科の里姨捨山の月をなくさみかねて猶長月十三夜になりぬ
木曽の痩もまだなほらぬに後の月

日吉の帰さ
升買て分別かはる月見哉
秋もはやはらつく雨に月の形

内にハまかりて西又の近江路に移りて
落とさに皆拝しあらし 近江
芭蕉の葉もしりせきいたる
六十六の人々芭蕉庵をとふらひて
妾言をと
義子里騎や秋のくれ
兄なる人の守袋より母が白髪をせむとて
子の玉くしげ涙も尽きてなく
手にとらハ消ん涙ぞあつき秋の霜
秋風や桐に動いて蔦の霜
見渡せば詠むれば見れば須磨の秋

秋十とせかへりて江戸をさす古郷

留別
送られつおくりつ果は木曽の秋

種が濱にて
さびしさや須磨にかちたる濱の秋

鹿嶋神前
此松のみばえせし代や神の秋

小名木川より船に乗て行
秋にそひて行ばや末は小松川

旅懐
此秋は何で年よる雲に鳥

秋ふかき隣は何をする人ぞ

[illegible]秋のせみ(?)りて眼[illegible]かれけり

鶴[illegible]人[illegible]のつるし[illegible]

悼老杜
風雅[illegible]て[illegible]するは[illegible]ぞ

武蔵野を出る時野ざらしを心におもひて旅立ければ
しにもせぬ旅寝の果よ秋のくれ

毒海長老我が草庵にて身まかりけるを葬りて
何ごともまねき果たる薄かな

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ

野水が旅行を送りて
見送りのうしろや寂し秋の風

東門宗竹の像かきて賛をもとめけるに
あちらむけ我もさびしき秋の暮

舩頭の尾[illegible]し秋の暮

所思
此道や行人なしに秋の暮

人声や此道かへる秋の暮

清水なる茶店にいこひて

松風の軒をめぐりて秋くれぬ

行秋や身に引まとふ三布蒲団

長月六日伊勢の遷宮を拝まんとて

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

行秋の猶たのもしや青蜜柑

行秋や手をひろげたる栗のいが

冬

桐葉亭にしばしやすらひける暫とゞまらんとせし時に

此海に草鞋すてん笠しぐれ

草枕犬もしぐるゝか夜の声

江戸を立出る時に

旅人と我名よばれん初しぐれ

一尾根はしぐるゝ雲かふじの雪

山城へ井手の駕籠かるしぐれ哉

時雨行や船の帆綱をとりつれて

初しくれ精も小篠をもらしけむ
かりくしくれ笠をきて通る僧
鶏の声をしくるゝうし寒かな
人くましくれに霜を重くとも
時雨るゝや田の並の樓の黒ねんと

草庵

深田の秋陽かる家に入りて
霜くりして糸もなのみ残る志くれかな
見るうちに志ぐれし志くれの大井川
つれつれと人もとりあれ神しくれ
新しき出家かけて早さしくれかな
冬かれ蒙井矩面白にて

径の木に戻るをいさめる志くれかな
人にものはしめて新て
初しくれ初の字をなる志くれかな
一しくれ深や降して小石川
冬籠や月もいとなる虫の吟
冬ちかし又よそそれん枝
金屋の松のふくしや　冬籠

醉酒堂　湖水の職を言わする田螺芦間の
ささみをなかぬ半時も踏る寒なる
難波津や田螺のふるも　冬籠
志りしかくれ居けるに人をなくされて

先ゆく梅を心の香筵
折くに伊勢あるや香筵
菊を王まつ折ふる神の落葉かな

千川亭

深川の風より冬を籬して
柴の戸に寒き木葉が嵐かな

尾の多川まて文志はかるしひたすら山家料理おもしろく
三十里尾張大根のさかなかな
落葉してぬかみそ桶もなかりけり
味噌は涕枯もさむし

霜月 雪はるか深川の旧草にかへりて
郡と出て神も旅寝の日数かな

深く新講や他のゆかりの遠え外
菊新たきり春しけり此新講
嫁子講 瑞うちに大様きこえけり
ありあま水房きてありけり嫁子講

文梁亭口切の日

口切に堺の庭そなつかしき
炉ひらきや左官老ゆく鬢の霜
木からしの里は竹しあはせかれ
こからしや竹よかくれてしまひけり
風や頬さはれいたむ人の顔

舟画賛

参州 鳳来寺

木枯風よ岩吹とかる杉の声

参河新城菅沼権左衛門宅

京にあきて此木からしや冬住居

多度権現まうでとて

宮人よ我名をちらせ落葉川

三尺の山もあらしの木の葉かな

平田明照寺李由子精舎にて此寺は二百年

百年の気色を庭の落葉かな

尊かる涙やそめてちる紅葉

道円居士の芳名をきく事久しきにまみえんことを願ひけるに其日をまちけるに初冬一夜の霜に消て

ことしはけふや一めくりにあたれりときゝて

そのかたちみばや枯木の杖の長

熱田に詣社頭大きにやぶれ築地もたふれて草むらにかくる

志のぶさへ枯て餅かふやどりかな

素秋の段落をとひて

花みな枯てあはれをこぼす草の種

三秋を経て草庵に帰れば旧友門人日々に集りていかにと問人々に答へ侍る

ともかくもならでや雪の枯尾花

十月八日旅中吟

旅に病て夢は枯野をかけめぐる

刈りあとや物にまぎれぬ蕎麦の茎
床かしき白ひやつけし梅の花
辛菊や小糠のかゝる納豆汁

兎庵斬雪別墅

熱田梅人亭葦書の額を打ちひよせて
水仙や白き障子の友うつり
これにならひて白といふものゝ子二人に桃先桃隣と名
つけゝる

其匂ひ桃より白し水仙花
蕎麦は後大根の外さらになし
鞍壺に小坊主のるや大根引
口よりも出て落しけり去大根

玄梅子旅宿にて菜根を喫して
武士の大根からき咄かな 嘲
冬かまへの磯よく鈍見るとさゞかなら
冬籠りや世に一たまの風の音
鳥毛探る梅より薫りて新鶯ろ
梅椿早咲ほめん保美の里
おもしろく茶入探梅ら梅椿
芹焼や裾輪の田井の初氷

防川亭

杜国かいねかりつ是なく一句
麦はえてよき隠れ家や畠村
さればさあてかれを待ちぬ霜の宿

貧山の釜霜に啼声寒し

茶のむさしても霰の枕かな

菖に菜はおりて見せけさ哉

病中

深川大橋成就せし時

有りがたやいたゞいてふむはしの霜

かりくと折ふし凄し竹の霜

家子にも霰や霜と捨てゝよし

初雪や幸ひ庵にまかりある

山中より子供と遊びて

はつ雪に兎の皮の髭作れ

南都にて

初雪やいつ大佛の柱立

旅行

初雪や聖小僧の笈の色

深川大橋かけかゝりける時

初雪やかけかゝりたる橋の上

初雪や婆々ひとり住荻の家

初雪や水仙の葉のたわむまで

夜着は重し呉天に雪を見るあらん

雪見にまかりきて

市人にいで是うらん雪の笠

旅人を見る

馬をさへながむる雪のあした哉

箱根こす人もあるらしけさの雪

中行しき人みなりをとりはくろひて

雪しらで宵師走の名月を

深川
八貧の内
米買に雪の袋や投頭巾

芭蕉翁人
贈和
君火をたけよきもの見せん雪丸げ

冬居成　おもふ所の器
酒のめばいとゞ寝られぬ夜の雪

草庵にて十二月
木枯の沖もくつや夜の雪

明徳の秋和陣葉に亭子浦のけるに雅高卉
雅章卿君都を遥て遥てゆるしにあつかりけるを京にて
京まではまだ半空や雪の雲

ふるちの雪　松ふる園の契かれ

熱田の宮にて終夜なりぬ
磨なほす鏡も清し雪の花

あるじの家にて思ひ甚を押ひ出て趣人に趣くる
二人見し雪は今年も降けるか

雪に飲ひとり千鳥を吟ゆける
雪ね竹箭作る人ゝ笠いりん

信濃をするころ
雪ちるや穂屋の薄の刈残し

いさゝらば雪見にころぶ所まで

おのが志は諸人よりもん世を去る行て其の後
志賀の里にかくれ侍しより今大津松本にて

智月といへる老尼は行すゑかゝる身なりと語り
出けるにてをりしもみけるに

かねの尼のすゑしや志賀の雪

湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

者かくむ鳥も雪はあしらはん

竹の賛

たはみては雪まつ竹のけしきかな

小町画賛

貴さや雪ふらぬ日も蓑と笠

雪むらに梁すゝむ侘人かな

寒山画賛

庭掃て雪をわするゝ箒かな

いさ子ともはしりありかん玉霰

画賛

琵琶行の夜や三味線の音霰

ふかゝひ芭蕉庵をつくりいとなみて

霰きくやこの身はもとの古柏

自画自賛

いかめしき音や霰の檜木笠

膳所の草庵を人々訪ひけるに

霰せば網代の氷魚を煮て出さん

雑炊に琵琶きく軒の霰かな

おりし雪ふりやなまんゑの面

尼さわく鴨羽田は面や雪の面

からさけも空也の痩も寒の中

月花の愚に針たてん寒の入

櫓の声波を打て腸氷る夜や涙

茅舎買水

氷苦く偃鼠か咽をうるほせり
すゝき釣やるまゝ氷る新法師
雛破りて根の氷の花見かし
きぬ手拂て手掛あかるまゝれ
残りや家を入日に新寒き
栽人を吉田に歎かせて
ましけれと二人旅寝のたのもしさ
乾鮭や何某殿を毛唐人
仙化か父に追いつく
神のとよまれて寒し濃ねすき
頭巾ちかる新さし四やの縄簾

蓬萊に栽まうしなから寒さかな
鯛の鱗くちも寒し魚の柳
葱白く洗ひよせてふかまさらに
かゝきくゝと帆柱寒き入江かな
あさのしさや海運なる根の紙衾
花で立て根の会もなかりけり
風来ちるよそ寒しとて
夜露一ッ利を剥したる旅の海かな
宿し山庵に薪割る小野のおく
根かのむなしの法師の巨蟒かな
おりくゝ人すかまに私く火燵かな

住つくね猿のしんや三巨旋

ふるさきや世をしのひて

霜の後ちそして暖る火桶かな

かゝへ行人のまくらかな

霜を請て鉢波ひくときおくりけり

かうかのはまたおこる火桶かな

骨箸や行くと見るまゝ陰の塵

女あまそうしなへる人を

埋火もさめや洞の言つる　喜

出家發心

うつゝなや新年のくすの新法師

たゝみつけて雪見よするつくかな

長頭丸賛

年さむくもやあらぬ翁の新法師

人く□ゑの法の名を乞もし□けれ

法くれて鴨はあまほの波のし

毛衣に法くみてぬくし鴨の声

ひつち田に霜はなれ花見るあしかな

鉢叩の演くれてうち笑ふ霜夜かな

鉢叩の暮をも見るや峰寺鳥

雪の夜や菜をもらいて鳴千鳥

一疋はなきのなるかな　川千鳥

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

いさみ足鷹川さゆる祈かな

伊良古崎ハ南海のきはにて鷹のわたりして渡る
所といへはいかなるめにもあはぬにや人も
程こゝろされかなしきかれし

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎
せなかしに一つよ ある生海鼠
行く何ともれ秋の海へるをてらく汁

熱田にて
拝ひきぬ鈍錦やして七日まて
或る家にて奴僕にわりてかしこく[illegible]の髭をそる
見事めくすし 膾もや河豚汁
ふく汁や鯛もあるのに無分別
世の中は嫁もめくるを 餅たくき

名所八体の内

網代おる野とまりしまく 鮮 扨
笠りけ季への集はゝ風雅も師走に
笠は季はきを我共なりて出るべし
松嶋や雲は走りて夜くへ[illegible]
まるき探る橋よ花見る影[illegible]
こゝろくて佛きせ女魏の縁[illegible]
よみ師も三十日にましし 何の[illegible]
蝶[illegible]やくに似竹何の高 [illegible]
[illegible]毎して見しや浮世の蝶 [illegible]
糸の杖の篆一臭雑波よのこし [illegible]
[illegible]くくるゝ毎遊に持くりける哉

旅行

山路や世は縷まて〳〵ね古盆子
蝶まきまさ枝の末の冒は風ふ〵
すゝきハ巳ぅ柳清る大ニふ
自白き師走ハ之の旅ヶ海若ふ

十二月廿日一井亭

旅寝よし寝ハ師走の夕月哉
何よ伝師走の市に行鳥
かく行先里師走の海のかいつぶり
年の市線香買に出ばやな
あの忘なかくとし波なれん
年忘之人よりて　喧嘩ふ

洛陽画別離景桂丸帰行

生きハ行きさ友よや年忘れ

乙酉の新春を来ぬ後て

人は家を寄せくる行ハ年忘れ
無為の人ハなきふくとし忘れ
せりかまて年忘する様婦ふ
手すれ子葉飯よつきんとしの暮
うれくときるる人や古暦

画賛

行とし(や)汝ケ穀の小松うを
旅寝なましに年はくれけきハ
としくれぬ笠着て草鞋きなから

こてくらひ蛍てくらひさするよくれはまた
めでたく役人は数々もいらん壱は音
月雪とのきまりけりしとしは音
角よ里や絲の緒よ掛く年は音
約としや菜よ見てゆき梅の音
一俵よの御器かもんとしは音
隠人にあてさ抱を行く年の音
鈴の出る甲斐あれとしの音
分別の屁たくさけ年の音

雜

みたらしの水は佛の道をたどりて
世にあるも定に京紙のやさしさ
三聖人圖　月花は古わや滿の師とせ
森名よ里るよ寄て杖雲堀川のほとりに荷鞍
うちかゝりてるらも岸ね
歩行かへ杖つき堀を落る
雛よとに誰か川渡行人
かゝりまね湯殿よもしく彼の
海のうねる人は魚に

越後新潟にて
月花もなくて海のひよりかな
浮よする鳥やきしきさる扇

布袋の画賛
物いはしや袋の中の月
とし

俳諧書目　文栄堂　河内屋嘉七板

芭蕉翁附合集評註　篤老編　二冊
翁一世の附句注解して見やすくす

古今句鑑　素外選　四冊

同　拾遺　四冊

俳諧十家類題集　五冊
芭蕉　其角　嵐雪　去来　言水　北枝　来山　希因　蕪村
右十人発句類題して数多集む

新十家発句集　四冊
士朗　月居　蒼虬　道彦　完来　成美　升六　寿陶　乙二　櫻斎
西余すもれなし

新五子稿　二冊
蕉門中興名人五人の発句悉く集て類題なれ

俳諧発句題叢集　升六選　五冊

半化坊発句集　二冊

発句題林十二月抄　小本全一冊
古人の発句四季を十二月にわけ其名ある句のみをあつめ類句のまぎれなきやう作者の名をしるしたり

花屋菴校
芭蕉袖艸紙
翁一代のくハしき事 月次并とりわけ折々の変風を記ス 全三冊

流行七部集
月居 完来 奇淵 當時流行の面白き 著述物七部集也

蕉句三傑集 一冊
此書嵐雪 其角 丈草 去来 三家の發句を 撰ミ集めたるもの也

花屋菴著
俳諧季寄圖會
四季 雑 全部十五冊

繪入注解
季寄摺火打
再校二冊
古板を校正して 新版に出し 好人の便とす

增補花火草
立圃著 小本 一冊

俳諧宗氏奥 五冊

芭蕉翁七書
小本 二冊
行脚掟 二十五ヶ条 七ヶ篇 句合 嵯峨日記 發句集 奥の細道 笈の小文 合綴

四季併題櫻苗
全二冊
花屋菴家通月 並諸名家の句を撰ミ しるして数多集む

蕉句類纂集
五亭仙末儒著 全五冊

季にあるべきを漏さぬやうにあつく集め給ふを加へ 分類して誤なきを要とし 實に季寄大全のものなり

花屋菴校
季寄絹篩
三ッ切懐中本 全一冊

俳諧詞寄濱のまさご 全一冊

流行百家句集 升六選 二冊